

## *Jude the Obscure* : 悲劇の原因

### *Jude the Obscure*: The causes of the tragedy

内藤 歆修

#### 要 旨

結果的には Thomas Hardy の最後の小説となってしまった *Jude the Obscure* は数々の非難や中傷、悪意のある激しい攻撃にさらされた。その原因は、「人間の最も強い情熱」即ち「性」の問題を正面から取り上げ、また当時のヴィクトリア朝社会の制度や因襲を痛烈に批判したからである。

本作品の主筋は、主人公 Jude が学問を志し、大学へ進学して、牧師になることを夢見ながら努力したが、社会の厚い壁に阻まれて挫折し、失意の内に死んでいくという悲劇である。熱心に勉強している Jude を脇道に逸らすのは肉への欲望であり、結婚などにまつわる社会習慣や因襲や制度である。勉強に没頭して、実社会と接触することが少なかった Jude が、Arabella との誤った結婚により社会の因襲と関わり合いを持つことになる。社会の因襲に捕らわれると、蟻地獄に落ちたように抜け出すことは至難の業である。

彼にとって性の欲望に打ち勝つことも極めて困難なことであった。彼は、肉体と現実の生活を体現する Arabella と精神性や知性が先に立ち実生活とかけ離れた言動が目立つ Sue との間で、性的欲望と知的憧れに振り回されながら揺れ動き、自己の確立も出来ずに、不安定な生活を続ける。2人の女性を通じて、社会の制度や因襲と闘うが、社会から遊離して行くばかりである。大学に拒否され、学問の夢を捨てる。最後に家庭崩壊を招き、愛する Sue に捨てられ、Arabella にも見限られて、死に到る。

Hardy は本作品で Jude と Sue を通じて、社会制度や因襲が矛盾に満ちており、非人間的で不公平であると告発し、批判している。主人公たちは、性の問題に苦しみ、社会制度や因襲に反逆し、敗北を喫し、報復を受けて、幸せを阻まれ、不幸になって行く。本稿では主人公の悲劇はどのように起こり、その原因は何処にあるのかを明らかにすることを試みる。

出世作 *Far From the Madding Crowd* (1874) 以来、Thomas Hardy は愛し合う男女がいかにしたら、幸福になれるかということを目指してきた作家であると言えよう。そして *Tess of the D'Urbervilles* (1891) と *Jude the Obscure* (1896) の2作では、男女の愛の幸福の大きな障害として、ヴィクトリア朝の社会の仕来りや因襲があると批判・糾弾しようとしている。元来、Hardy は自然、個人の性格、結婚問題、社会構造の問題など、あらゆる方面から人間の本質や自然を観察して来た。その結果、Tess と Jude という個人名を題名にした作品の中で、当時なおヴィクトリア朝の人間性を蔑ろにする因襲道徳に蹂躪されていた人々に厳しい警告を発したのであろう。

殊に *Jude the Obscure* では、Sue と Jude という 2 人の主人公が自分たちの幸福を妨害する強固な敵である、この因襲に対して戦いを挑み、奮闘し、敗れ去る物語を描くことで、作者は因襲を疑問視し、それを批判の俎上に乗せようとしている。

この小説を書いた目的を Hardy は Preface to the First Edition に「肉と霊の間に闘われる死闘」を率直に語り、「果たされなかった志の悲劇」を明らかにすることだと述べている。この「霊と肉との闘い」はヴィクトリア朝時代に特徴的であった精神と肉体の対立の問題であり、Hardy はそこに第 1 の問題点を定めこの作品を書いているのである。こうした明確な問題を扱うと作者自身が述べているが、その 3 年前に出版された *Tess of the D'Urbervilles* とは作品の評価にかなりの差がある。本作品にはどちらかと言うと失敗作という見方と、Hardy の最高作という見方が批評家の中で混在している。だが作品の完成度としては成功しているとは言い難いという意見の方が多いのは尤もである。Jude に降りかかる問題は各々重いのに、物語は統合性をもって完結することがなく、中途半端な印象を読者は抱かざるをえない。*Jude the Obscure* はどのような解決の道も道徳的結論も提示せず、消化不良を起こすような、不完全な作品で読者の不安を呼び起こす作品と言える。十分な発展もなく、解決案も提出されないという欠陥は、当時のイギリスの抱える諸問題を鋭く抉り出して読者に突き付けることは可能にしているが、一方読者の不安を殊更に強め、小説を読んで満足やカタルシスを得ようとする気持ちを欲求不満に陥らせてしまう。Hardy は社会に根を張る問題を読者に抉り出して見せたが、それに対する解決策を提示しなかった。それに対して読者は不安な気持ちを持っただけでなく、抉り出された問題そのものも、読者を不安にし嫌悪感を抱かせるものであった。彼はこの小説において、キリスト教とオックスフォード (Christminster) と結婚制度、即ち宗教、学問、法律、つまりヴィクトリア朝社会を支えている 3 本の支柱に痛烈な批判を加えている。殊に貞淑さや謹厳さを強く要求するヴィクトリア朝の体制を挑発するかのように批判の手段とされたのが赤裸々な性の取り扱いだった。男女の性関係や婚姻関係の Hardy の描写は当時の性道徳が容認する範囲を大きく超えていたようだ。これらの要素が幾重にも重なり合った結果が読者の激しい反感<sup>1)</sup>を呼び、これ以後 Hardy は小説の筆を折ったのである。

確かに、この時代の Hardy は大きく変貌している。初期の田園生活を賛美する穏やかな心温まる物語を語る面影は全く残っていない。主人公 Jude Fawley は Wessex の寒村 Marygreen に、幼くして両親を失った 11 歳の孤児として登場する。ここで小さなパン屋を営む大伯母 Drusilla Fawley に養われて、昼間の学校にも通えない貧しい夜学の生徒の身の上である。昼間は近所の百姓 Troutham の烏おどしの仕事をして働き、稼いだ僅かなお金を家計の足しにしている。早くも Hardy はこの物語の冒頭で、Jude の働いている畑について彼に 'How ugly it is here!' (p. 38)<sup>2)</sup> と呟かせている。そこでは、初期の作品の舞台となった牧歌的な Wessex はその姿をすっかり変貌させてしまっており、Hardy 作品の魅力的特徴であった美しい自然はどこにも見当たらない。

Hardy が小説の背景とした 19 世紀後半イギリスでは農村へ都市の文明が急速に及んでいた。

かつては美しい自然に抱かれ、人々が互いに助け合いながら農作業を行っていた農村に都市の文明が侵入し、自給自足の農業が利潤第一の商業的農業に変化していくにつれ、自然は破壊され美しい環境が失われてゆく。そして農村の文明化は人間の心まで浸蝕してゆき、人をさもしい功利的なものに変えてしまう。一方、ここに登場する Jude はこれと対極にいる、ものを感じ易く、優しい心情の持ち主である。彼は幼くして早くもこの世は醜く、生きるのが辛いことを感知しているかのようなのである。

Jude は優しく、感じ易く、弱い性格のために、自然界の諸相にも過度な程敏感に反応し心を痛める。蒔いた種を食べられないように鳥を追い払う仕事をしていたが、彼は麦をついばもうと来る鳥に、自分と同じ余計者として同情を寄せ、同類者としての愛を感じる。不思議な連帯感の糸が両者の生命をつなぎ合わせ、鳴子の手をゆるめて、鳥に好きなだけ食べさせた。自分を必要としないこの世の一切から疎外された孤独感に突き動かされ鳥に同情を禁じ得なかったからである。彼の優しさは日常生活で出会う些細な事柄にも過度な反応をする。ヒナ鳥の巣を取って来ても、気が咎めて眠られず夜明けとともにヒナを巣と共に元の場所に返しに行く。また地を這うミミズは踏まないように避けて歩く。この性格はこれから彼が「ひどく苦しまなければならぬ運命」(p. 41) を暗示しており、自分を殺し、他者への配慮を優先させるようにと、彼の行動を規制して行くようになる。

鳥に対してささやかな同情心を示したために Troutham を非常に怒らせ、Jude は職を失うことになる。同時に「ある生き物にける慈悲が他の生き物に対する酷い仕打ち」(p. 42) になるといふ the flaw in the terrestrial scheme (p. 40) に気付かされる。寄る辺のない彼には、取り巻く環境に押し潰されぬために something to anchor on, to cling to (p. 49) が必要であった。大半の子供は幼い頃から両親に育てられながら、現実社会の中で親や周囲の者たちの教育によって少しずつ社会適応能力を身に付けていく。だが、少年 Jude は既に両親とは死別し、身寄りと言ったら、彼を余計者扱いする大伯母だけで、こうした社会的教育は殆ど受けていない。夜学に通って勉強するのが精一杯であった。学校で習ったことや本から得た不十分な知識だけが現実社会で生活していくのに身を守る手段であった。そして実社会での理想と現実、建前と本音の区別を誰も教えてくれず、自分も気付かずに成長していくことになる。

「無用の者」(an undemanded one) (p. 42) 意識を強く抱く Jude に「すがりつくもの」を与えてくれたのは Christminster へ去って行く Richard Phillotson であった。聖職者になるために大学教育を受けようと大望を抱いていた Phillotson は Marygreen を去る時、なぜここを捨てて行くのかと Jude に問われると、学歴や学位がより高い社会的位置に就くために必要であると説明する。これを聞いた Jude は無意識に彼と全く同じ望みを持つ。これはヴィクトリア朝後期に顕著であった労働者階級の階級上昇志向に合致するものであり、かつ拠り所とするものがない Jude に理

想的な目的となり心の支えともなる。Jude は先生の去った後、Christminster への憧憬を募らせて、学問と知識のその町に出て、大学に入り、やがては高位の聖職者になりたいという夢を膨らませて行く。Hardy は Jude を学問に燃える情熱を傾けるのに相応しい少年の姿として描いているが、彼の理想を遂行するには想定外の現実の障害が次々に起こり、その方針は変更を余儀なくさせられる。大学進学のための勉強のためにはギリシャ語やラテン語の文法書が必要であるが、Jude にはそれを手に入れる手段がない。しかし、Phillotson が出発前に Drusilla に預けてあったピアノを取りに人を使わしてよこした時、一縷の望みを託し、本を買ってもらおうべく連絡すると、暫くして本が送られて来た。その文法書は Jude の現在の能力では到底理解の及ぶものではなかった。この現実には彼は自分の生命を否定し、人生を呪い、世間から疎外されているのを強く感じた。Christminster への憧れ、即ち学問への憧れは Jude の積極的な生命の発現で、彼の理想の一面を示すが、世間からの疎外感は消極的な負の面で彼の人生を混迷に陥れる元凶になる。彼はこの2つの相反する面の葛藤に終始苦しむことになる。

やがて成長した Jude は Alfredston で石工の仕事をし、週末には Marygreen に帰り専ら勉強に勤しむという快適な生活を送っていた。そのようなある土曜日の午後、Christminster への憧れに胸を躍らせ、これから読むべき古典の数々を眩きながら、知的なものへの最高の陶醉に浸っていたその瞬間に1人の女性から去勢豚の陰部を投げ付けられた。Jude の夢を破って、彼の注意を引き付けたのは付近に住む養豚業者の娘 Arabella Donn であった。いかにも Hardy らしい、衝撃的でコントラストのはっきりした運命の皮肉の表現である。彼の学問への夢は Arabella によって中断の憂き目を見ることになる。

She whom he addressed was a fine dark-eyed girl, not exactly handsome, but capable of passing as such at a little distance, despite some coarseness of skin and fibre. She had a round and prominent bosom, full lips, perfect teeth, and the rich complexion of a Cochin hen's egg. She was a complete and substantial female animal — no more, no less. (p. 62)

Arabella は Tess の肉体的魅力を彷彿させるが、Tess の清純さを全く欠いている。Hardy は今まで描いた女性の中で初めて Tess にその肉体が象徴する健全な性の要素を与えたが、どんな苦難に遭っても彼女は清純さを失うことはなかった。しかし Arabella は Tess の清潔さを全く欠いて、むしろ「性」のみが極端に強調されている。作者はこの小説は「人間に知られた最も激しい情熱」、即ち性を扱うと言明<sup>3)</sup>しているが、Arabella は正に性の象徴として登場し、Jude に肉欲の誘いを仕掛ける。

The unvoiced call of woman to man, which was uttered very distinctly by Arabella's person-

ality, held Jude to the spot against his intention — almost against his will, and in a way new to his experience. It is scarcely an exaggeration to say that till this moment Jude had never looked at a woman to consider her as such, but had vaguely regarded the sex as beings outside his life and purposes. (p. 64)

Jude は Arabella によって「情熱」の試練を初めて経験させられる。彼女を見た時、2人の間には「一瞬通じ合うもの、親和の無言の告知」(p. 63) がひらめいた。Jude は彼女に惹かれて行く自分をどうすることもできない。彼女の性格は彼の向学心を妨げるものと十分に自覚しても、肉欲の深みにはまって行くことに抵抗できない。今まであれ程学問に熱中して来たのに、彼女の出現によって全く別の世界に迷い込み、学問研究の夢という壮大な目標を見失うことになった。Jude の肉欲への耐性の弱さが、彼の夢の実現に立ちほだかっている。この時点では Jude は現実と理想の相剋により夢の世界から現実の世界へ彼女を切っ掛けとして滑り落ちて行くことは露程にも考えていない。Hardy が意図する本作品のテーマは主人公 Jude の敏感で情熱的な気性と残酷で因襲的な社会との闘いである。Jude が Arabella と深い関係を持つことが、この因襲に支配される社会に取り込まれる端緒となる。彼女と知り合ってからというもの、勉強には手が着かなくなり、聖書を読もうとしても、彼の意志に反して全く身に入らず、ただ Arabella のことばかり考えてしまう日々が続いた。

Arabella は女の性を男の本能に直接訴える術を会得しているかのように Jude を誘惑する。自分の大きな胸の谷間に鶏の卵を抱いてヒナに孵そうとすることで Jude の気を惹く。幼くして母をなくし、孤児として苦しんだ Jude は母親への憧れが強かった。彼女の豊満な肉体は勿論肉欲の対象であったが、母性の象徴でもあった。このような女性の存在を前にしては、Jude にとって Christminster も聖書も色あせ、学位を取り、神学者や聖職者になる考えなどどこかに押しやられてしまう。理想を追うことで無意識に閉じ込められていた、彼の内にある現実的な面が表出し、最も根源的な動物的本能とも言うべき女性に対する情熱の虜になってしまった。Arabella と出会った時、Jude は「肉」の欲望が「精神」とは全く無関係に人間を動かすことを発見し、驚き戸惑いながらも「肉」の衝動に突き動かされてしまう。

In short, as if materially, a compelling arm of extraordinary muscular power seized hold of him — something which had nothing in common with the spirits and influence that had moved him hitherto. This seemed to care little for his reason and his will, nothing for his so-called elevated intentions, and moved him along, as a violent schoolmaster a schoolboy he has seized by the collar, in a direction which tended towards the embrace of a woman for whom he had no respect, and whose life had nothing in common with his own except locality. (pp. 67-68)

この圧倒的な「肉」の欲望の処理が一段落し自分の置かれている状態の全体像が見えるに従って、彼女が生涯の伴侶とするには相応しくないことを悟り始める。Judeには肉の欲望もあるが、同様に知識への強い憧憬もある。Arabellaでは知的な充足がされないことに気付く。それで、どうかして彼女との淫らな関係を清算したいと願うようになった矢先、妊娠を口実に結婚を迫るArabellaに対し愕然としながらも、自己犠牲的性格のJudeは責任を取って正式な結婚をすることに決めた。

強引なやり方で成立した結婚には愛もなく、あるのは肉体だけの関係であった。Arabellaは妊娠に関しては、いつまでも嘘を隠し通せるとも思えず、ある晩彼に真実を打ち明けた。それを聞きJudeは罨にかけられたとしきりに後悔する。愛がなくとも、結婚した夫婦という現実が存在し、それだけが形骸化し明白な事実として残ると実感する。共有する価値観や考え方、物事に対する感じ方を持たない夫婦は長く関係を続けることは難しい。子供という枷も幻と化してしまっただけで、程なく豚の屠殺という結婚生活の危機の場面を迎える。Arabellaは肉質を良くするためにできるだけ時間をかけて殺すようにと主張する。だが性格の弱いJudeは、動物が苦しむ様子に耐えられない。動物への憐れみなどかえって生活の邪魔にしかならないと考えるArabellaは、動物を苦しめるくらいなら経済的損失をも厭わないと考えるJudeが、ひと思いに豚を殺してしまうのを、ひどく罵る。2人は最早妥協的な共同生活を維持していけないことを悟る。この喧嘩の最中、動物への慈悲を説くJudeに彼女は「貧乏人だって生きなきゃならないわ」(p. 88)と叫ぶ。先ず生き抜くこと、これがArabellaの唯一の処世訓で社会も法律も、愛も慈悲も生きるための手段であって、彼女の人生を規制するものではない。Judeの唯一の慰めであった書物を、彼女が生命本能の敵として、豚の脂で汚れた手で投げ捨てるに及んで、破局は決定的となった。少年期から生きることに関心のないJudeとは対照的にArabellaは生命力の塊である。喧嘩の場面は2人が全く相容れない人生観の持ち主であることを互いに確認する場である。その後Arabellaは実家に戻り、やがて家族と共にオーストラリアに移住してしまう。

生命力に溢れるArabellaは社会という大地に深く根を下ろし、法律や社会習慣をうまく利用しながら、逞しく生きていく女性であった。社会の仕来りや生きて行く「常識」を十分に身に付け、男性に関してもJudeが初めての経験ではなさそうな積極的な女性である。当時の未婚の若い女性にとって結婚は人生最大の職業選択であり、彼女にとっても、結婚という生涯安定した生活の場を確保するのが一番の課題であった。そこで彼女は将来の夫としてJudeを確実に罨にかけて捕らえるために、自分の肉体的魅力を武器として使ったに過ぎない。若い男女が肉体交渉を持って子供ができたなら結婚するという、当時の社会習慣に則って行動し、両親もそれに協力して、その結婚には反対しないという社会的了解があったのをJudeは理解していなかった。そのような相異なる社会認識を持つ2人の結婚を語る作者の狙いは、愛情無くして結婚してしまったJudeにArabellaが利用した結婚を巡る当時の習慣を批判させることにあった。

There seemed to him, vaguely and dimly, something wrong in a social ritual which made necessary a cancelling of well-formed schemes involving years of thought and labour, of foregoing a man's one opportunity of showing himself superior to the lower animals, and of contributing his units of work to the general progress of his generation, because of a momentary surprise by a new and transitory instinct which had nothing in it of the nature of vice, and could be only at the most called weakness. (p. 85)

作者は2人の結婚を、Judeの学問で身を立てたいとする願望が女性に対する肉欲の前に屈した結果として捉えている。彼らの結婚に到るプロセスはJudeの側から見れば「肉」と「霊」との葛藤に見えても、Arabellaの側から見れば、結婚するために当時の習慣に従った世間にありふれた行動であったと言えよう。

JudeはArabellaと別れた後、結婚生活で中断した学問の夢を成就すべく、Christminsterに出て来る。また、今のJudeにとってはこの場所にもう1つの期待があった。Alfredstonに下宿していた頃大伯母Drusillaの家で写真を見たSue Brideheadという従妹が忘れ得ぬ存在となり、是非会いたいと熱望していた。彼女も当地に住んでいるとのことだったので、知的欲求よりも情緒的欲求から、来たかったのである。それでも到着した夕刻、長く憧れていたこの町を歩き回り、学問の世界に浸り切っているように恍惚として、空想の中で学者たちに声高に話し掛け、自分の希望の実現を夢見るのであった。翌日仕事探しに出掛けるが、昨夜親し気に見えた教会の面影や偉人・学者などの姿は影も形もない。夜見た理想の姿と昼間見る現実の姿。この二面性はJudeにとって重大な問題になっていく。実際この町は学問の府であると同時に、Judeのような肉体労働者があくせく働きながらも貧困な人々が多い、光と陰の交叉する町でもあり、必ずしも人間に光明を投げ掛ける存在ではなかった。学問への意欲を復活させて、張り切ってやって来たJudeであったが、従妹のSueのために再び学問への志が薄らぎ、現実へと傾斜して行く。

JudeはSueのことが念頭から離れることがなかったが、彼女に近付こうという感情はArabellaの時と同様に性的なものに基づいていると気付くと、親密な関係になることは避けるべきであると自重するのであった。しかし、Sueの方がJudeがChristminsterにいることを偶然知って、接近して来た。また同時にJudeは彼女を通じてPhillotsonに再会した。Judeは彼が既に聖職者になっているとばかり思っていたが、相変わらず昔のままの教師であった。彼が聖職者になる夢を捨てて現実的な人間になっているのを見て、Judeはそれに影響され、学問の志から遠ざかるようになる。

HardyはSueにArabellaとは全く対照的に、鋭い知性と感受性を与えている。幼い頃から大の読書家で古今の作家を愛し、日常の会話にはJ. S. MillやSwinburneを引用し、これらの読書によって培われた知性は彼女を因襲を脱した新しい型の女のように見せる。因襲を破る新しい女らし

く、キリスト教には否定的で、異教的な考えに傾倒し、ヴィーナスとアポロの像をキリスト磔刑の画と並べてみたり、背教者ユリアヌスに共感を示したりする。Jude の真剣な祈りには偽善を感じると評する。彼女は自ら「引力と発芽の法則以外は、どんな法則にも縛られない」(p. 158) ことが好きで「世の除け者イシュマルの子孫」(p. 158) がその身の中に潜んでいる娘なのである。

19世紀後半の初め頃は、イギリスでは John Stuart Mill (1806-73) が「自由論」(1859) で世間の既成概念に唯々諾々と従うことに反対し、聖書を抛り所にする宗教信仰に Charles Darwin が発表した「種の起源」(1859) の与えた衝撃が広い範囲で感じられたと言われている。Sue は J. S. Mill の信奉者で、進歩的な女性である。彼女は Jude と同様に家庭的には不遇であり、幼くして母を失い、父とも早い時期に別居し孤独の生活をしている。また Jude と似通った生活環境のために、世間に入って行く訓練が充分になされておらず、考えが観念的且つ抽象的で実社会にしっかりと足を下ろしていない。Jude にとって学問の夢は孤独な生活の支えで、自負心を満足させ、社会の荒波から自分を守る一種の防波堤ともなっているが、Sue にとっても読書は因襲の女性を脱しているという意識を持てる大きな抛り所となっている。2人共学問や知識を身に付け、それによって何か別の目的を完遂しようとするのではなく、学問をし、知識を得ること自体が目的化してしまっている。彼らは有能であったが、社会から遊離し、その能力を十分に発揮できないでいる。

読者は読書に裏打ちされた Sue の新しさに色々な面で驚くと同時に、彼女の心の奥に潜む逆逆の精神を時に感じるのもこのためであろう。この新しい女性が教会に密接な関係を持つ聖具店に勤めているという矛盾は当然なことにすぐ解消される。異教の像を隠し持っていることで女主人と仲違いして、仕事を辞めざるを得なくなった。Jude は Phillotson に Sue を代用教員として雇ってもらうことにする。彼女は頭脳明敏で知識が豊富であり代用教員として有能であった。それが原因で Sue と Phillotson の仲が急接近し、18歳も違う2人は婚約し結婚することとなる。

一方この頃 Jude は独学ばかり続けていても先が見えないことを悟り、数人の学寮長に学問についての相談の手紙を出す。やっと来た返事には、学問をするより石工の職に留まっていた方が良くと書いてあった。この拒絶の言葉に激しい衝撃を受けた Jude はこの気持ちを酒に紛らわせるために居酒屋に行き、酔って周囲に挑発されラテン語のニケア信経を暗唱してみせる。

'Good! Excellent Latin!' cried one of the undergraduates, who, however, had not the slightest conception of a single word. (p. 142)

居酒屋で石工の Jude がラテン語を暗唱するのを一言も理解できない大学生が野次り、嘲笑する。この場面は痛烈な皮肉を生み出している。ラテン語の分からない大学生が学ぶ Christminster が学問都市として、Jude の激しい情熱に応える術もなく形骸化していることに対する皮肉であり、

ひいては学問の世界そのものが批判されていると考えても間違いはないであろう。しかし、内容が空虚な大学生が在学する「学問の府」を皮肉っているにしては、Jude の抗議は殆ど効果がなく空回りして、受けない余興のように居酒屋に虚しく響くのはなぜであろうか。それは Jude にとってラテン語が、諸刃の剣のようなものであったからであろう。無知な大学生は皮肉の対象になって然るべきであろうが、Jude 自身が最終的挫折に到るまでラテン語の習得が大学入学へのパスポートであると思込んでいるのも愚かである。堅固なイギリスの階級制度の壁は単なる語学習得だけでは乗り越えられるような単純なものではない。ここで作者の皮肉は怠惰な学生を擁する Christminster のみならず、階級制度などの社会の現実は無知な Jude にも向けられ、居酒屋に居合わせた聴衆の反応によって視覚的にも聴覚的にも辛辣に描写されている。それ故、Jude のラテン語の知識は彼の社会的地位を向上させるどころか、反対に彼を道化として社会の底辺へ引きずり下ろすことになる。

Jude が Christminster を目指した発端は非常に情緒的なものであった。大好きな先生が語った夢の断片に誘われ、遙か遠くに望んだ Christminster は霧の中から立ち現れ、その 'points of light like the topaz' (p. 46) という姿は 'city of light' (p. 49) に見えた。この町は Jude にとって何より崇高な美しい建築物としての存在であった。Jude を学問へと突き動かす第 1 の理由はこのように霧の中で光り輝く美しい都市へのロマンティックな憧れであった。その目的を成就するための適切な指導も受けず、方策や計画もなしに、身分も富もない Jude はギリシャ語やラテン語の習得だけで大学に入り、階級差を乗り越えようとする非現実性を全く考慮に入れていない。学問をして牧師となり、社会的地位を確立しようとする世俗的野心はあるが、目的を達成する方法は全く現実的でない。Jude には実社会の状況把握が欠如していて、学問追求の希望が夢物語でしかないのは明らかであろう。Jude のこの思考回路は Sue にも類似性が見られ、2 人の悲劇の原因にもなっている。

学問への夢を砕かれた頃、大伯母の家にいる Jude に思いがけずに Sue から会いたいという手紙が来る。会ってみると、Sue は 2 年間の師範学校を終えたら Phillotson と結婚することを約束していると告白する。Sue が口には出さなくとも自分に好意を持っていると信じ込んでいたので、Jude は激しいショックを受ける。2 人の仲が親密になったのも自分が仲介役となったと思いい、この皮肉な関係に堪らない感情を抱く。しかし婚約はしていても、結婚は先のことだと、Sue は依然として Jude と逢瀬を重ねる。そんなある日、2 人は Wardour 城を見に行く。帰路歩いて鉄道駅に行き Melchester に帰ることにする。しかし 2 人の勘違いから汽車には間に合わず、やむなく羊飼いの母子の家に泊めてもらう羽目になる。その結果 Sue は師範学校の寮を無断外泊することとなった。無断外泊の罰として命じられた謹慎処分に耐えられず Jude の下宿に逃げて来る。婚約者 Phillotson がいるのに、このような行動を取る Sue は Jude には「一種の謎」(something of a riddle) (p. 154) であった。Sue は Jude に着る物を借り、逃げて来る途中川を渡ったときに、ず

ぶ濡れになった衣類を赤々と燃える暖炉の火に乾かしながら、これまでの生活の一部を、かつてなかったほどに素直になって話す。18歳のときに Christminster の大学生と知り合い、15ヶ月間同棲生活を送った。「殆ど男同士のような」(p. 168)、肉体関係のない生活で、彼は彼女のこの冷たい態度に非常に傷付き、苦悩の末に病を得て死んでしまった。この肉の否定、肉体関係の忌避は性同一性障害とも違う、Sue の人間的特徴の1つである。肉欲の忌避は彼女に男性として接する誰にも示される。この大学生のみならず、夫の Phillotson、また長期間に渡って Jude にもそうであった。

学校に戻った Sue を待っていたのは退学処分であった。師範学校の教師たちが、Sue が Jude と無断外泊し、その罰である謹慎を破ったことで退学処分にした際、こうなった以上 Sue は Jude と結婚するのが社会的に最善であると無用の、同時に因習的な忠告をする。Sue が退学処分で情緒不安定になっている時、Jude と会い 'I don't mind your loving me, — if you want to, much!' (p. 184) と愛を打ち明けた直後、彼は自分には妻がいると告白した。男性に自分から愛を告げるなど潔しとしない Sue が自ら進んで Jude の愛を求めた時、今までずっと妻がいたことを彼が隠していたことでプライドも信頼も傷付けられて憤り、嫉妬のため 'I suppose she — your wife — is — a very pretty woman, even if she's wicked?' (p. 185) と言う。この言葉に理知的な姿を消した、月並みな女が垣間見える。Sue は不実な Jude に対する反抗と、師範学校教師たちが示唆した男女関係が無実無根であることを示すために突然 Phillotson との結婚に踏み切る。Jude に対して復讐するかのように、親戚が近くにいないので、父親代わりに花嫁の引き渡し役をして欲しいと依頼して来た。戸惑いながらも彼は引き受け、無事彼女を結婚させてやる。

暫くして Jude は Drusilla が重体というので見舞いに行く途中 Christminster に寄って、以前ラテン語を披露した酒場に入ると、偶然にそこで女給をしている Arabella に出会った。彼女はオーストラリアから帰って来て、ここで働き始めていたのだ。その日 Sue と Drusilla の見舞いに行く約束をしていたにもかかわらず、Arabella の巧みな誘いによって、彼女と一夜を共にすることになる。生来の意志の弱さと Sue に結婚された絶望感による虚脱状態から来る心の隙を突かれて Arabella の意のままになってしまった。そして Sue との道ならぬ愛よりも Arabella との束の間の交わりに激しい自責の感情を抱く。Jude が Sue を深く愛しているながら Arabella の慣れ親しんだ肉体に簡単に誘惑され、後で悔やむ様は、Angel に思いを寄せる Tess が Alec と復活させた肉体関係や、また *The Woodlanders* の Grace と Marty の関係と相通じるものがある。志を立てて Christminster にやって来て、Jude は今挫けそうな学問への意志を懸命に掻き立てようと努力しているが、Sue と Arabella という対照的な女性の間で揺れ動く、彼の理想と現実の対立は大きくなるばかりである。Arabella は現実としての肉体、Sue は理想としての精神という程対照をなしており、Jude 自身にはこの Arabella と Sue の二面性が潜んでいる。それに加えて少年時代からの過剰な感じ易さに、ある時は Arabella、ある時は Sue というように心が揺らめき、苦しみ悩むの

である。2人の女性に翻弄され、肉欲に惑わされ、社会の枠組みからはじき出されようとしていた。

Drusilla が亡くなった時、2人は会い、互いに求め合う気持ちを抑えることができなくなってしまう。Jude は Sue に接吻をしたいと言う。

If given in the spirit of a cousin and a friend she saw no objection: if in the spirit of a lover she could not permit it. 'Will you swear that it will not be in that spirit?' she had said.

No: he would not. And then they had turned from each other in estrangement, and gone their several ways, till at a distance of twenty or thirty yards both had looked round simultaneously. That look behind was fatal to the reserve hitherto more or less maintained. They had quickly run back, and met, and embracing most unpremeditatedly, kissed close and long. When they parted for good it was with flushed cheeks on her side, and a beating heart on his.

The kiss was a turning point in Jude's career. (p. 233)

これは正に彼にとって人生の 'a turning point' となった接吻であった。この後彼は Sue への愛と性愛を否定する聖職を考え合わせ、最早聖職者にはなれないと思い、あれ程大事にしていた宗教書類を燃やしてしまう。

Sue は夫と離婚し、Jude と同棲を始める。2人は共に住むようになって、正式な結婚をせず、Sue は Phillotson に対する時と同様にはっきりしない生活を続けようとしている。結婚をしていないという、社会に認められない同棲生活のため Jude の仕事も今や零落し低級な墓碑石工として、近所に住んでいる貧しい人々を相手にしたものとなっていた。彼は同棲という不自然さを解消しようと正式な結婚をしばしば Sue に要求し、彼女も同意するのであったが、実行の段になると法律上生じる夫婦関係の束縛を嫌い、結婚は成立しないでいた。Sue は Jude に未だ肉体を与えていなかった。熱烈に愛し合っている Jude にも肉体関係を拒否するのである。

何故それまで Sue は肉体関係を忌避するのであろうか。極めて弱い性本能の持ち主で性交渉を嫌ったり、中性的な生き方を好んだり、男性になりたいと願望する女性の存在は否定できない。しかし、Sue は Jude に恋をし、深い愛情を抱き、女性としての情念を十分に持っているのに、肉体関係を拒否するというのは異常と言わざるを得ないだろう。では、このように Hardy が人物のリアリティを危険に曝しても、Sue のような女性をなぜ書いたのか？ ヴィクトリア朝の因襲的な社会とそれに対抗して自由を求めて芽生えた思想の対立。Sue はこの自由の思想に共感を抱く女性であった。女性の解放、男女平等、女性の自立の気運。しかし、こうした考えの胎動や気運があっても、現実の社会では男性優位は微動もしない。進歩的な考えの持ち主で極めて弱い性本能の持ち主でもある Sue は、男性主体の肉体関係を結ぶときに、女であることを強く意識させら

れるのではなからうか。Sue は自分の自由意志のもとでの関係でなければ我慢できない。教会の発行した結婚許可証の権威をかさに、夫が妻の気持ちにかまわず、有無を言わず強制的に関係を迫ることに全く耐えられないし、夫の欲求に常に応じなければならないのは大変な苦痛であるとも言う。

'What tortures me so much is the necessity of being responsive to this man whenever he wishes, good as he is morally! — the dreadful contact to feel in a particular way in a matter whose essence is its voluntariness!' (p. 230)

男女の対等な関係を求める気持ちが、受動的で屈辱的な性行為という否定的な考えを抱かせ、Sue の弱い性本能を益々助長させているのであろう。Sue は妥協し、Jude と結婚式を挙げようと役所までやって来るが、そこに結婚をすべく来た女性が既に妊娠をしているのを見て、ひどく動揺し、その場から逃げ出す。産む性としての屈辱を再認識し、それが彼女に新たに増幅した恐怖を抱かせ挙式を留ませたのであろう。

Sue は男女同権の考えを抱いていても、性本能が弱かろうとも、女性の心を捨てていない。Jude と同棲を始めて暫くすると Arabella が頼み事をしようと訪ねて来る。Jude が会おうとすると彼女を a fleshly coarse woman (p. 276) だ、などと言って、嫉妬心から妨害して会わせようとしない。肉体を否定した、彼女の考える理想的な男女関係が Arabella の登場で揺さぶられることを予感し、Jude を自分のもとに確実に繋ぎ留めておくために、あれだけ嫌がっていた肉体を自ら与える。最早理知の人の影はなく嫉妬にさいなまれる女の姿しかない。ここに Sue の進歩的女性という見かけの下に潜んでいる女性の本質が姿を現している。彼女は普段は心優しい思いやりのある女性に見えるのに時々他人の心の痛みには残酷な程無頓着でいることがある。同棲したが肉体関係を許さなかった大学生の死についての話し方や、Phyllotson と別れる時愛情など感じなかったと冷酷な言葉を吐く様子や、最後に Jude を捨てて前夫のもとに戻る行為に、何の反省もなく相手がどんなに苦しむだろうかという同情も持たずただ自分の考えに従い、感情に没入するのみである。自己中心的な考えに浸って他に配慮すべきことが思い浮かばないのである。だが、Arabella が送って来た、子供には愛他精神を発揮して進んで引き取る気持ちを示す。

Jude を訪問後 3 週間程たった頃、Arabella から便りがあり、2 人の間にできた子を育てて欲しいと言って寄越した。Little Father Time と渾名されるこの子は Arabella が Jude に黙って、オーストラリアで産んだ設定になっているが、Hardy は悲劇の一種の象徴として登場させている。この子の設定自体リアリティに問題があることは否めない。Jude も Sue も最初は当惑したが、理想主義の 2 人らしく「この時代の子供たちは全てこの時代の大人が世話をすべきだ」(p. 288) というプラトンの考えで引き取ることにする。この子は子供でありながら顔が老け込み考え方まで大

人じみた面があり、「悲劇の顔」(p. 293) をしていた。実際 Jude と Sue を悲劇のどん底に陥れることになる。Sue はこの子の出現を契機として Jude に肉体的に屈服させられ、またこの子の行為によって精神的にも屈服させられ廃人同然になってしまうことになる。だが 2 人はその前にこの子のために普通の家庭を築こうと、正式な結婚をすべく、教会や役場に 3 回も足を運ぶが、果たせない。Sue が色々な理由を付けて尻込みするのを Jude は生来の優しさで許してやるが、これが 2 人の人生を悲劇に導くことになる。2 人の自由な関係を許さない社会は情け容赦もなく彼らの生計の手段を奪い、また彼らの性格の弱さを突いて襲いかかって来る。

Little Father Time の存在は読者を不安定な気持ちに追い込む。彼が登場して間もなく、列車の中で乗客がバスケットに入った子猫の滑稽な仕草に笑うと、‘All laughing comes from misapprehension. Rightly looked at there is no laughable thing under the sun.’ (p. 289) と呟いているように見える。読者は彼の甚だ子供らしからぬ考えに驚かされる。「子供の仮面を付けた老人」(p. 289) とされる彼は、陰気な雰囲気身を付けており、いずれ何か悲劇的な事態が起こる予感を抱かせる。

Jude は自分の最後を予感したかのように、彼にとっては the centre of the universe (p. 330) であった Christminster に移り住むことにする。子供の頃から抱いていた学問の志への郷愁と執着心を捨てきれず、しかし、その意志は殆ど消え去り、今や儂い希望となってしまうのを分かっていながら、「死ぬために」(p. 330) 来たようなものと感じている。当日は大学創立記念日でその見物に気を取られ、夕方遅くなってしまい、家を探すのに失敗し、やっと一夜を過ごす宿しか貸してもらえなかった。2 人が正式に結婚していない上に、子供が多いことが原因であった。今までと同様に正式に結婚していないことが招く、生活苦と闘う厳しい放浪同然の暮らしがここでも待っていた。その夜翌日の宿を探しに Sue は Little Father Time を連れて歩き回るがどこも受け入れてくれなかった。母親の窮状を見て彼は自分が生まれて来なければこんなことにはならなかったのにと考え、恐怖の念を抱き、恐ろしい言葉を吐く。

‘I think that whenever children be born that are not wanted they should be killed directly, before their souls come to ’em, and not allowed to grow big and walk about!’ (p. 343)

Sue でなくともこの子供らしからぬ、深く人生に絶望した言葉にはとっさに適切な返事はできないだろう。読者はここで少年 Jude が同じ年頃で、追われる鳥に「彼らも僕と同じくこの世では望まれない存在」(p. 39) と嘆いたのを思い出すであろう。Jude と Little Father Time の考え方は深い所で根を同じにしている。the wish not to live (p. 346) を心の底に確固として抱いている、この老成したような少年は現実の人間というより観念の産物の色合いの方が強いが、Hardy はここにリアリズムを捨てて、シンボリックな手段で Little Father Time の殺人と自殺という Jude と

Sue への最後のカタストロフィを準備している。

この時 Sue はこの子の絶望の深さを測り得ず、いつもの率直さで、もう 1 人子供が生まれるのだと話し、彼の最後の決心をする背中を押す。この言葉が悲劇の幕を開けてしまう。彼は Sue が子供を産むという行為を承知しなかった。彼の非難の言葉には若い男女の性についての深刻な問題が含まれている。男女の愛の行為がもたらす結果が人の不幸に直結するというのは生まれて来る子供には誠に不条理なことである。しかし過去にも現在でも、これから将来も男と女が存在する限り、存在する永遠の問題である。彼は 'If we children was gone there'd be no trouble at all!' (p. 344) と言って眠りに就いたが、翌朝 Sue が少しの間目を離した時、2 人の子供を殺し自分も首を縊って自殺する。

Little Father Time が登場して以来、Hardy が描いて来た異常な行動の総決算と言えるものがこの衝撃的な事件である。Hardy はこの不条理とも言える問題を一種の象徴として用いることによって表現している。そしてこれは Jude その人の象徴であることを示している。この惨事によって舞台で言えば場面は暗転し、事態は今まで思わなかった方向に進んでしまう。身籠もっていた Sue は子を死産でなくしてから、教会に入り浸るようになり、同時に Jude を拒否し、自分は矢張り Phillotson の妻だと言い出した。「私たちは神の力に従わなければならない。他に道はない。神と闘っても無駄だ」(p. 351) と考えるのである。惨事は Sue と Jude が利己的で神に無頓着で不敬であり、肉の楽しみに耽ったための天罰と思うようになる。長い間強い肉体嫌悪の念をやっとの思いで踏み越えた女の思考過程として、これは当然の成り行きかも知れない。Arabella に対抗して、自らを殺し Jude に肉体を許したが、子供の惨事の衝撃が引き金となって、今まで抑圧して来た、本来の肉への嫌悪が幾重にも倍加し彼女の理性を粉砕してしまったのである。その結果、天罰という迷信的な考えに捕らわれ、その考えが次第に Sue の心を占領して行き、Jude が如何に説いても最早論理的思考はできなくなってしまう。ただおろおろと Jude との結び付きを否定するのみである。Phillotson の妻だと言い出した理由については、'O I can't explain! Only the thought comes to me.' (p. 352) という返答しかできない。かつては結婚を神聖な誓い(sacrament)とは見なさないと言い切った Sue は今では自分は神によって永久に前夫と結び付けられていると繰り返すのみであった。

異教の神々の偶像を求め、ロウソクを立てた Sue は、Little Father Time により価値観をひっくり返され、今度はキリストに信仰心が向かっただけで、彼女の 1 つの信条に固執する性質は全く変化していない。ただ固執する信条の種類が変わっただけである。それ故、彼女の心の中は見掛け程思想転換において矛盾を来しているわけではない。J. S. Mill の思想に基づく自由に愛するという立場から結婚制度を拒否していたが、彼女はこの極端な思想的転換によって、Jude が止めるのを振り切って、愛を感じていない Phillotson との再婚を受け入れる。自己崩壊を起こしてしまったので内部の自己に頼れなくなり、外部に存在する形式に頼らざるを得ないのである。結局形

式的因襲道徳に支配されることとなった。ここで彼女の自由の思想—自由恋愛、信教の自由、社会的拘束からの自由—は完全に破綻してしまう。その理由の1つとして彼女の身勝手な感情の動きがあるのは否めない。Jude と Phillotson の優しさと優柔不断さが、Sue の身勝手さを増長させ、当時の社会の基礎構造からはみ出させ、爪弾きにされ、家族の崩壊を招いてしまう。更に今まで散々 Jude を振り回し、惑わし苦しめた挙げ句、身勝手な理由で彼の孤独には全く注意を払わず、愛していない Phillotson のもとに帰って行く。この観点からすると子供たちの犠牲はただ Jude の悲劇の象徴であるとしか考えられない。

Jude の場合優しさは心の弱さ、自己抑制力の弱さに大きく関係している。彼は学問の道を目指しながら、Arabella の色香に迷い肉欲に溺れる。彼女と別れ、志を新たに勉強を再開しようとするが Sue に心を迷わせ、翻弄され続け、家庭の崩壊後、捨てられてしまう。Sue の我が儘を常に寛大に許し、身勝手な理屈を止められず悲劇を引き起こしてしまう。Sue によって大きく思想的影響を受け、教会への尊敬をすっかり失ってしまい、頼るべきものは何1つなくなった Jude にとって彼女を失うことは苦しみが増加することであった。Jude の病気は悪化して行き 1人 '*Let the day perish wherein I was born.*' (p. 408) と「ヨブ記」を囁き自己否定の言葉を口にしつつ息が絶える。

性に放縦で次々と男性遍歴を重ねて行く官能的な Arabella と性的には潔癖で気難しく、夫婦生活をして性生活を拒否する精神主義の Sue、対極にいるような2人の女性の間に揺れ動き、性の欲望を抑えきれずに、彼らの間を行ったり来たりしているうちに、少年の頃からの学問への情熱を見失って、真の自己の道も見出せず、Sue に去られ、Arabella に見放され、社会からもはみ出してしまい、死に到る。Jude には官能性と精神性のいずれにも通じる二面性があり、自己矛盾に苦しみ、生来の優しさから、確固とした道を見付けられず、現実社会に押し潰されて自ら滅びてしまう。Christminster に受け入れられるために一生懸命勉強したが、知識習得自体が目的化し、その知識が Jude の人生に資するところがない。そのため Arabella の生き方にも Sue の考え方もただ唯々諾々として従って自分が如何にあるべきかという考えを持たずに、2人の女性の生き方に巻き込まれて様々な困難にぶつかり、才能を浪費し精神的に苦悩し、肉体的に消耗し、心の支えであった Christminster に拒否されながらも、そこに身を置いてその生を終わった。恵まれなかった環境、冷たかった社会、叶わなかった夢、不幸な女性関係、失敗に終わった人生、これらが Jude の内部で作用し自己崩壊に到り、死の床でのヨブ記の呟きに収束したと言える。

Sue も自分の思想のため生き方を誤り、不幸のどん底に落ちる。Hardy は希望を実現させようとする Jude に対して、様々な障害を用意するが、それに十分な解決策を与えていない。中心人物たちはその障害に苦しみ、誰1人平坦な道を歩めない。そのため悲劇の様相を帯びた生活を送ることになるのである。*Jude the Obscure* が芸術作品として完成度が高いとは言えず、幾つかの欠点を持っているにしても、未だに人気を持っているというのは、社会対個人という何時になっても

変わらぬ葛藤を真正面から扱い、Jude や Sue という不思議な魅力を持つ人物像を創造したからであると言えよう。

注

- 1) R. G. Cox (ed.), *Thomas Hardy: The Critical Heritage*, Routledge & Kegan Paul: 1970, p. 249
- 2) P. N. Furbank, *The New Wessex Edition: Jude the Obscure*, Macmillan, 1975  
引用は全てこの版からで、以下頁数はカッコの中に入れ、引用の後に示す。
- 3) *Ibid.*, Preface to the First Edition